

第三百十六回 青葉会

平成二十四年七月二十六日(木) 午後六時〜九時
丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉 石川清 今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 小西弘子 豊田ゆたか 福島正明 山崎亜也

山内天牛

〈投句〉 伊賀山そらお 小川恭延 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 中野一灯 古田昇 宮内規雄

渡邊盛雄

〈紙上選句〉 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 星田啓子 村田くに子 山崎青史 山本三恵

《選者吟》

木道や子供の傘へ鬼やんま

万里子 (清・隆・青)

(青：尾瀬の情景でしょうか。広がりがある句)

乾(から)びゆく蚯蚓(みみず)や今朝も人身事故 全 (紀・隆)

(☆：蚯蚓が路上にひからびているのは、自死らしい?)

みちのくの詩友直伝海鞘(ほご)捌く 全 (紀・龍)

恩師からお呼ばれ祇園の床涼み 全 (紀)

居眠りか携帯電話か冷房車 全

新猿翁のカーテンコール

《互選句》 ☆猿翁の黒衣(くろこ)は中車汗涙 紀久男 (万・敏・隆・く・天)

チエスキークリームロフにて

モルダウの谷に涼しき弥撒(みさ)の鐘 一灯 (龍・敏・ゆ・允・正)

昼寝する赤子我家の十代目 天牛 (忠・弘・龍・敏・允)

福山雅治から新猿之助へ祝幕

四点 ☆引幕の睨む押隈(おしくま)梅雨明くる 紀久男 (万・隆・允・啓)

☆ティファニーの軒より動けぬ驟雨かな 弘子 (万・敏・正・三)

☆笹(ささ)干して深(しん)と蕎麦屋の昼寝かな 全 (万・忠・龍・く)

訪れし人なき生家合歓(ねむじ)の花 ゆたか (隆・允・啓・く)

(隆↓「訪れる」が良さそう)

七夕や一年一壘インク買ふ 天牛 (ゆ・正・啓・青)

(青：乞巧奠(きこうでん)の趣旨に良く合った句)

パリ祭や今は涸れたる書齋人 全 (正・啓・亜・三)

☆遠花火虚しさ伝ふ音のずれ 盛雄 (万・猛・ゆ・天)

汽車に乗る青田の故郷へ飛込まむ 忠彦 (猛・弘・三)

夏草や東電社宅に売看板 全 (清・ゆ・啓)

☆沙羅咲くや友の遺墨の李白の詩 ゆたか (万・紀・允)

☆香水の妻いそいそと退院す 昇 (万・猛・弘)

(☆↓退院の妻の香水いそいそと)

国際線ゲートに消ゆる夏帽子 全 (正・く・青)

(青：夏帽子はバナマ帽か。夏帽子の句には珍しい景を詠んでいる)

過去帳の江戸の元号風入れる 正明 (允・亜・三)

ひたむきに金魚逐ふ子と小半時 亜也 (清・啓・青)

(青：幼児の真剣な目差しがいい)

☆シチリヤの漢(をとこ)の句ひとマト撈(もぐ) 盛雄 (万・紀・三)

「黒塚」

二点 法悦の老女踊るや夏の月 紀久男 (弘・龍)

節電の掛け声褪(あ)せて夏深し 猛 (清・く)

夏草やその勢いをくれたまえ
 児はみんな追ひかけが好き麦藁帽
 ☆夏帯を直し合ひたる幕の間(あひ)
 ☆炎天や心頭滅却嘘つぱち
 ☆集ひきて月下美人の夜は更けぬ

ウイーンにて

オペラ観て白夜の古都のカフェに酌む
 八方を丸く収める枇杷の種

(青：俳句らしい省略の利いた佳句。今回の天)

麦こがしすんなり呑めぬ妥協案
 朝まだき竿先震ふ岩魚かな

きつつきの音絶え間なき鞍馬山
 生餌(いきさ)追ふ家守の膳や灯る窓

蚊一匹に寝付き襲われ寝不足に

夏枯の句座に元気な八十路かな

雲走り樹々は波打ち送り梅雨

草いきれ散歩の足にまといつく

東慶寺岩の湿りに岩煙草

原発の事故調査出る海開き

緑蔭や頭にポタリ鳥のふん

時代屋の黒扇風機なお鎮座

怪鳥の舞い降る基地の暑さかな

鬱の字のいかにも鬱や梅雨深く

(青：全く同感。梅雨深くが効いている)

耳に残る祇園囃子や終電車

☆海亀の影追う小舟夏の濤

ひまわりや隠し続ける裏の顔

生れ付きの日和見主義者青すだれ

小糠雨額あぢさゐの色深む

風揺らぎ祭囃子の遠近(をらこち)に

猛 (敏・天)

忠彦 (ゆ・く)

弘子 (万・垂)

恵洲 (万・忠)

堂哉 (万・忠)

一灯 (弘・敏)

正明 (青・三)

全 (清・弘)

亜也 (忠・天)

そらお (猛)

清 (垂)

全 (紀)

紀久男 (猛)

猛 (紀)

全 (清)

恭延 (紀)

全 (隆)

忠彦 (ゆ)

健介 (正)

全 (忠)

恵洲 (青)

堂哉 (垂)

ゆたか (万)

正明 (垂)

全 (龍)

規雄 (猛)

亜也 (天)

● 次回青葉会

八月二十三日(木) 午後六時〜九時

(丸紅 談話室)

▲ 当季雑詠各自五句。投句は二句

九月二十七日(木) 談話室

十月二十五日(木) 全

以上 文責 紀久男

平成二十四年七月旬会報

一 今回は先生以下10名出席。投句9名。和夫さんが急性大動脈解離で入院された（九月手術予定の由）こともあつて当会も夏枯状況。しかし八十代の先生、天牛さんは御壮健です。

先生からの葛饅頭（茂蔵）と野菜チップ、弘子さんからの薄皮饅頭（郡山名物）、正明さんから球磨焼酎「豊永蔵」、亜也さんの純米吟醸「真澄・野可勢」、小生の吟醸「笹の川・ほろ酔」（郡山）と盛沢山の甘辛を賞味しつつ猛さんの司会で快調に推移。御覧のように天牛さんが好成績でした。

当日の話題（一）小澤さん森垣さん平島さんの計報（二）恭延さんと和夫さんの病状（三）五郎太さん亜也さんらの「フランス人の流儀」読後感（四）カフコジャパン投資社長に就任の川合友実（ともみ）さん（先生の長男）のこと等々。

二 関係者近詠

新緑に未明の雨の粒光り	万里子	ちらほらと青田に沈む小鷺どち	允章
雀らへ煙るかに降る松花粉	全	妻留守のひとり碁を打つみどりの夜	全
起きがけにどくだみ百本抜く日課	全	浅沙咲いてふつと明るき水面かな	全
五月晴れ迷子札付け児ら噪ぎ	全	三味の音の洩れくる路地や梅雨の月	全
日盛りを時告げ続く尾長鶏	全	打水や二の腕白き若女将	恵洲
夏草は花を掲げて刈られけり	全	中古バスの図書館居りぬ緑蔭に	全
雷近し白黒無声映画観に	全	蟻の列わづかに乱し如露の水	全
常連に燕加はり小商ひ	眞希子	十人の三人病欠梅雨の宴	全
水族館薄暑受け口の魚群れて	全	――「大鉄会」七月	
遠足のしんがり務む変声期	全	別々のドア押す事情さるすべり	青史
引き抜きて置きしが根付き著莪の花	弘子	影踏めぬ仲でありけり白日傘	全
愛鳥週間雀みてこそ絢爛に	全	シューマイの横浜に来てシャーベット	全
パンケーキへすべるバターや若葉冷	全	草笛の石垣に跳ね樹々に浸む	堂哉
御旅所や鯛の尾頭でんと据ゑ	全	香水の終の一滴旅想ふ	全
河に鯉空には幟清みわたる	忠彦	碧き眼の短かき浴衣小さき下駄	全
産卵に鯉小競り合ひ若葉風	全	古簾ゆらし風くる家居かな	允章
風薫る夫婦で人情映画観に	全	京よりのクール便なり鱧料理	全
夏の天金環日食渡りけり	恭延	夏草や大人世界のいじめつ子	隆
五月寒スカイツリーをひと包み	全	真夏日も遮る「運命」コンサート	全
日焼けせる孫初めての浴衣着る	和夫	ジャズの音もムツシュ染みてるパリの月	龍平
女子バレー見んとて春の甲夜かな	全	親子歌舞伎教室	
三陸の鉄路がたざた夏鷗	紀久男	汗みせぬ女形の化粧児ら大受け	紀久男
――「萬緑」八月号――			

三 三津五郎の近詠

2001年十代目襲名を機に俳句を始めた同丈は黛まどかの句会に参加しております。

七月下旬日経新聞に俳句を始めた経緯について寄稿したり、「俳句」八月号に西村和子と「芭蕉の魅力」について対談。八月中旬〜九月初め紀伊国屋サザンシアターで「芭蕉通夜舟」（井上ひさし作）主演しますが切符は完売。二句だけ紹介します

打水を避けし鼻緒の薄浅葱
蜜豆や老妓に父のことを聞き

八月九日

以上

紀久男記